

＊平成31年度「ゆいの会」総会報告＊

2019年4月13日（土）午前10時から11時45分までの間、長島愛生園事務本館2階大会議室で平成31年度総会と研修会を開催しました。出席者17名、委任状出席者43名（会員数228名）でした。

総会では、企画部局、歴史館、ふれあい、傾聴・個別対応、文芸、広報部局からそれぞれ前年度活動が報告され承認されました。これに続いて前年度決算報告、監査報告が行われそれぞれ承認されました。

この1年、ゆいの会は個別ボランティア活動を地道に行うとともに、養成講座開催（第17回）、夏祭りボランティア、長島第2回クリーンハイキング、忘年会を実施し、十坪住宅街頭募金活動（岡山駅西口2階通路）、十坪住宅修復保存に向けたクラウドファンディングに取り組み、クラウドファンディングでは目標額50万円に対して約70万円の寄付を受けることができました。ゆいの会が行っている十坪住宅修復保存運動についてはしばしば新聞などマスコミ報道もされており、会員の皆さんもご存じのところと思います。今後ともご協力・ご支援をお願い致します。

総会後、研修会「文芸ボランティアの活動 島田等資料を中心に」が正田邦男会員（6期生）を講師として行われました。正田会員から、現在取り組んでいる島田等の資料整理作業について、パワーポイントを用いて報告・解説をして頂きました。また、多摩全生園山吹舎の修復復元後の姿、少年舎の状況についてもパワーポイントを用いて報告・解説して頂きました。

研修会後、晴天の下、野外に出て満開のサクラの下で賑やかにお花見をしました。松谷会員（16期生）より、隔離の歴史を伝える建造物を残すための募金活動として、長島－藻掛－虫明をつなぐマラソン企画が提案され、お花見参加者一同賛同し、前向きに検討することになりました。

世の中に たえ桜のなかりせば 春の心は のどけからまし 在原業平

（事務局長 山本勝敏）



お花見参加者たち

ハンセンボランティアニュース 結・ゆい・YUI 第36号

目次

1.	ハンセン病家族訴訟、原告勝訴確定	1
2.	ゆいの会平成31年度総会報告	2
3.	ボランティア活動報告	3
	①文芸ボランティア	4
	②光明園買い物ボランティア	
	③夏祭りボランティア	
	④ふれあいボランティア	
4.	第18回ハンセンボランティア養成講座	5
5.	第3回クリーンハイキング	6
6.	連載企画「世界遺産登録するならこの遺跡―」	7
	第6回 長島の戦争遺跡から 今も残る「防空壕」	
	ゆいの会のほり完成	
7.	十坪住宅修復保存活動報告	8
	クラウドファンディング結果報告	
	世界遺産NPO報告	
	長島を走りませんか！	
	編集後記	





撮影：趙根在

●文芸ボランティア活動報告

―森田竹次から島田等そして 宇佐美治に繋がるものとは―

2015年5月に「島田倉庫」の資料30箱分の段ボールを軽トラで曙団地に移動することから始めました。その段ボールを2017年から順次、歴史館打ち合わせ室で開け、「らい」誌のバックナンバー、島田等宛の約3000通の封書・ハガキ類の書簡などを整理し、その後、病棟2階の「ゆいの会作業室」で、さらに手帳、新聞記事、雑誌記事、森田竹次資料（遺稿集、書簡、直筆ノート、原稿など）の

ボランティア活動報告

分類作業を始めました。大きな分類は終了し、現在は森田竹次・島田等の直筆ノート中身を読み込み、ノートの表題を作成しています。この作業から見えてきたことを報告したいと思います。

始まりは、森田竹次（1910～1977・67歳）です。森田竹次は、福岡県柳川市の有明海に面した農家の長男として生まれました。そして、1933年（23歳）菊池恵楓園に収容されます。そこで、3年間少年舎の寮長をします。その後、1942年（32歳）長島愛生園に収容されます。1954年（44歳）には、山鳥舎（不自由舎棟）に入り、勉強会などを開き、森田学校（山鳥学校）と呼ばれます。この中に、島田等がいました。1977年（67歳逝去）後、遺品を整理する中、原稿はほとんど刊行を待つばかりに整えられていたので、故人の遺志を実現させるため、島田等が中心となり「森田竹次遺稿集刊行委員会」を発足させ、自伝的作品集『死にゆく日にそなえて』を1978年に刊行しました。

詩人・思想家である島田等



展示の状態：下段前列左3つ目に吉備津の狛犬が見える。

（1926～1995年・69歳）の代表作は、『病棄て 思想としての隔離』です。この難解な作品を解く手がかりは、愛生編集部資料倉庫の島田ファイルと今回整理している「島田倉庫」資料です。この書籍に関する成立過程の資料・ノートなどが残されています。是非、研究者に解明して頂きたいと思います。私たちが出来ることは、そのための資料整理だと思っています。

島田等は、三重県志摩半島に生まれました。1947年（21歳）に三重県から29名の人々と共に長島愛生園に収容されました。1953年（27歳）から文藝協会の評論部会などで書き始めます。1964年（38歳）に「らい詩人集団」をつくり、詩誌「らい」を創刊します。その詩誌は1980年

（54歳）第25号まで続けます。そして、1982年（56歳）に入園者50年史『隔絶の里程』編集担当しました。1992年（66歳）に『詩集 返礼』を自費出版し、1995年（69歳）膀胱ガンになりますが、延命治療を拒否し、逝去しました。遺骨は、故郷の海に散骨されました。

死後、後継人である宇佐美治（1926～2018年・91歳）は1996年（70歳）の時に島田等の残された作品を編集して『島田等遺稿集 花』を出版します。宇佐美治は、愛知県で生まれました。1949年（23歳）長島愛生園に収容されます。1953年（27歳）らい予防法改正促進委員会の委員になります。1995年（69歳）日本ハンセン病学会に入会します。1998年（72歳）東大阪にある「ちいさなおもちゃ博物館」に、島田等が全国から集めた郷土玩具を寄贈しました。1999年（72歳）「ハンセン病遺囑裁判」瀬戸内原告団長になります。2007年（81歳）『野道の草 ハンセン病絶対隔離政策に真向かった70年』を出版。昭和寮の庭にブレハブの「島田倉庫」に遺品を収納。2018年（91歳）逝去しました。

そして、今文芸ボランティアの人たちの手で、その資料が分類、整理されています。

（文芸ボランティア担当 正田邦男）

●光明園買い物ボランティア報告

私は今年の夏に、ゆいの会ハンセンボランティア養成講座を受講しました。5月に長島クルージングツアーに参加した時、いただいた資料の中に受講生募集のチラシを見つけ、私も何かお手伝いできればと思ったのがきっかけです。

以来、買い物ボランティアに参加させていただいています。回数はまだごくわずかですが、入所されている方々との素敵な思い出はたくさんできました。皆様とつても優しくてあつたかくて、笑顔でいろいろな話を教えて下さいます。

最初はいまぐさサポートできるか心配でしたが、入所者さんが「一緒に一杯飲みながら話をしよう」とコーヒをぐちそうして下さいました。趣味や昔外出した時の思い出話などを伺ううちに、緊張がほぐれたあのひと時は忘れられません。目の不自由な方の洋服を選ぶお手伝いも楽しい時間でした。とてもオシャレな方でしたので、服をオススメする際に、柄や色味をうまく伝えられたかどうかは今でも心残りです。療養所の歴史を、ご自身の体験談をもつてユニークに教えて下さる方とも出会えたり、毎回とても貴重な時間をいただいています。私なんかには想像もつかないほど壮絶な人生を、笑顔で

冗談交じりにお話して下さいたり、皆様の強さと優しさには胸を打たれるばかりです。

ゆいの会の先輩方や、光明園の職員の皆様も親切な方ばかりで、入所者さんへのサポートの仕方など学ばせてもらっています。これからも、皆様が少しでも多くの楽しい時間を過ごせるよう、微力ながらできる限り全力でお手伝いしていききたいと思います。

（18期生 寺下ちる）

●愛生園夏祭りボランティア

7月25日（木）に夏まつりがありました。主催は長島愛生園入所者自治会です。今年は、例年の福引きがなかつ



第44回 長島納涼夏まつり

たにもかかわらず、予想を超え一般の入場者は4,000名でした。世界遺産登録を目指しての様々な取り組みが報道され、関心が高まっていることが伺え、大勢の方々の交流の場となりました。ボランティアとしては、六甲学院・F I W C 関西委員会・ゆいの会などが参加しました。

ゆいの会の歴史館ボランティアには、遠路はるばる佐渡から13期生の遠藤さんが駆けつけてくれました。ボランティアの皆さんは、来館者の人たちにハンセン病問題のパネルを丁寧に解説しました。鶴見俊輔の研究者宮下さん、F I W C の矢部さんも歴史館でのひとときを過ごしました。和太鼓で始まり、能楽、御神輿、よさこいソーラン踊り、盆踊り（恒例の江州音頭）が終わると、鎮魂の2,200発の打ち上げ花火で長島中が彩られました。

なお、邑久光明園の夏祭りは、総合診療棟が工事中などで今年は、開催されませんでした。

（運営委員 正田邦男）

◎ふれあいボランティア終了のお知らせ 「たくさん思い出残して」

この度、ふれあいボランティアをいったん終了することになりました。2018年5月の病棟移転に伴い、場所の確保が困難なことから、活動を休

止していました。その後、病棟ではなく、センター棟や一般舎で生活している方を対象にした外出支援というかたちでの再開をめざして、愛生園看護部との話し合いを行い、今年度の総会では、新しい形での活動を再開することを提案いたしました。しかし、具体的に話を進める中で、入所者の高齢化に伴いニーズが少ないことや、介護の必要な方が多く、ボランティアでの支援は危険を伴う等の理由で、ボランティアでの外出支援は困難との結論に至り、一旦、ふれあいボランティアの幕を閉じることになりました。

2011年5月から開始したふれあいボランティアは単調な生活のなかでのボランティアとの社会交流の場であり、ボランティアにとつても、入所者との交流を通して、ハンセン病の歴史にふれることができる貴重な活動でした。ほぼ毎回参加されていた方もおられ数々の思い出が残されています。

これまでふれあいボランティアに協力していただいた皆様、ありがとうございます。集団での活動は終了しますが、今後も個別の支援請には答えていきたいと思っています。また、入所者支援の活動である光明園の買い物ボランティアに積極的に参加していただければと思います。

（ふれあいボランティア担当 志賀雅子）

第18回 ハンセンボランティア養成講座を開催しました！ ～18期生6名が誕生～

ことしの7月13日と20日の2日間、ハンセンボランティア養成講座が実施されました。受講生8名のうち、6名がゆいの会にボランティア登録されました。受講生の皆さんからの感想文のいくつかをご紹介します。



フィールドワーク



入所者との交流

- ・「病気にレッテルを貼ること自体おかしい」という言葉が強く印象に残りました。正しく病気を理解しようとするこ
とが大切だと思います。（医学）
- ・国の責任が明らかにされた今もなお、差別・偏見が残つて
いるこの世の中で、ハンセン病の元患者さんや、その家族
が安心して暮らせる社会とは何かというのを考えさせられ
ました。（歴史）
- ・ワークを通して、ボランティア活動を持続させることの難
しさ、大切さなどに気づきました。（ボランティア論）
- ・本などでくみ取れない、入所者さんの思いや気持ちに触れ
られたような気がしました。端的にわかりやすくハンセン
病の歴史をお話してくださいましたが、長い間想像を絶する
苦しみがあったと思います。貴重なお話をありがとうございました。（入所者との交流）
- ・自分の関節が曲がらない、視野が狭くなるなど、高齢者体
験を経て、介護にどれだけの配慮が必要か分かりました。（介護実践）
- ・愛生園には2度行ったことがありますが、光明園はつい
通り過ぎていました。小学校や棧橋、監禁室など貴重な遺
産が残っていることを初めて知りました。人権教育の場と
してもぜひ活用してほしいです。（フィールドワーク）



介護実践

☆メーリングリストのご案内☆

皆様の情報交換のために、メーリングリス
トを設けています。ぜひご参加下さい。
ご参加希望の方は、ゆいの会事務局ま
でご連絡ください。

（連絡先は1面に記載されております。）

ゆいの会ブログ（ときどき更新中！）

当会の活動のほか、ハンセン病問題に関
する最新の情報も随時掲載しています。

<http://hansenvolunteer.blog.shinobi.jp/>

世界遺産を目指す島、長島をクリーンに



参加者 116 名で記念写真

3 回のクリーンハイキングの実施で、愛生園のハイキングコースの全行程が終了し、目に見えて綺麗になりましたが、まだまだ人力では収集できない多くの大型ごみが残されています。参加者からも継続して参加したいという声が多く寄せられており、今後もクリーンハイキングの取り組みを継続していきたいと思っています。

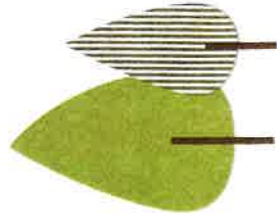
2019年6月2日（日）に愛生園、倉敷ハイキング倶楽部のご協力で第3回クリーンハイキングが実施されました。今年は、「倉敷ハイキング倶楽部」が、県内の山の会が毎年おこなっている「清掃登山」との位置づけで取り組まれたため、参加者は116名（ゆいの会11名、一般参加者31名、倉敷ハイキング倶楽部関係64名）で、過去最高でした。

山の会関係者は、牛舎、相愛の磯、誠心会館、報国農園跡の2コースに分かれ、入所者の生活の跡が残された農作業小屋周辺のごみを収集しました。ゆいの会・一般参加者は相愛の磯で、海から流れ着いた漂流ごみ等を収集しました。参加者は、残されたゴミの多さに驚きながら、生活ごみを島外に出せなかったという隔離の歴史を学びました。

＊参加者の感想文より＊

- ゴミが多いのにびっくりした。外に出せないという理由があったとのこと。来てみていろいろ知る事ができました。
- 多勢は何ものにも勝ると思います。たくさん集まって作業する中でやる気も出るし、力になると思います。新聞を見て参加という若い方に励まされました。
- 長島愛生園について知っていましたが、ゴミ事情については知りませんでした。クリーンハイキングを通して知る事ができました。
- 来るたびにきれいになっていくのがうれしい。
- 昔から現在までの生活を考えさせられました。
- 歴史を残すため少しでも助けになれたことがよかったと思います。
- 2回目の参加です。前回取り切れなかったゴミも集める事ができました。また回数を重ねてハイキングコースの整備に協力したいと思います。

（運営委員 志賀雅子）





「世界遺産登録するならこの遺跡！」

第6回 長島の戦争遺跡から今も残る「防空壕」

ハンセン病の隔離政策と戦争の深い関連はすでに繰り返し指摘されています。「らい予防法」が成立（1931年4月）した同じ年に「満州事変」（9月）は起きました。戦時中の療養所の様子は各自治会史などにも詳しいです。長島両園の死者数だけをみても戦争末期の44、45年は突出しています。軍国主義、戦時体制はハンセン病と療養所のくらしを非常に苛酷なものにしています。

44年8月にマリアナ諸島を占領したアメリカ軍による本格的な本土空襲は同年11月から始まります。光明園で防空壕掘りが始まったのも同じ8月のことで、園内に複数の横穴式壕や「掩蓋壕」が手掘りで作られていました。赤い瓦屋根が連なっていた光明園は「軍需工場と間違われて攻撃される」といううわさもあったそうです。愛生園でも崖を利用した横穴式壕（八か所）などが「特別作業」で作られています。

これら多くの壕は戦後次々になくなり、痕跡をうかがうことができませんが、一ヶ所だけ残っています。

「戦争末期になると防空壕掘りの指令を受けて、不自由者退避用の壕を三団体（注・防護団、青年団、婦人会）協力して掘る事になった。素掘りの粗末な壕だが、生きのびる為と思えれば懸命に掘った。出来上がると退避訓練、防空演習などを行った。」（光明園自治会史『風と海のなか』より）光明園の木尾湾から島内道路をはさんだ反対側の斜面をよく見ると、草の中に二つの穴（高さ、巾ともに1.5m）があります。これがこの防空壕だと思われます。現在、入口は金網でおおわれ、中までは見通せませんが、二つの穴は奥でつながっていると聞きました。横には壕の上にあった病棟からの避難用階段も残ります。



えは皆懸命に掘った。出来上がると退避訓練、防空演習などを行った。」（光明園自治会史『風と海のなか』より）



「国威宣揚」「紀元二千六百年記念」とある掲掲塔（愛生園・光ヶ丘）

「敗戦直後の八月二十日、月例記念式の席上光田園長は『戦争がすんだ、すんだといって喜ぶ奴はバカだ。戦争は一時停戦で談判が成立しなかつたらいつ又始まるかわからん』といって、テーブルを叩いて防空壕掘りをやめたことを叱った。」（愛生園自治会史『隔絶の里程』より）

壕は草の中に忘れられたようにひっそりと今もあります。私たちが忘れてはならないことを今も語りかけているようです。

参考：「長島愛生園と戦争」（岡山の平和教育 第33号）岡山県教職員組合
教育運動推進センター 2015年刊、「邑久光明園と戦争」（「同36号」同18年刊）

（13期生 羽原敏徳）



～年会費納入のお願い～

ゆいの会の活動は、会員からの年会費(年間2,000円)と、協力者の方からの寄付金によって支えられています。

<振込先>

◆ゆうちょ銀行からの振込は

記号 15490/番号 33536171

◆他の金融機関からの振込は

金融機関コード

9900/店番 548 預金種目 普通

店名 五四八(ゴヨンハチ)店 口座番号 3353617

※振込手数料は各自ご負担下さい。

会員の皆様のご協力をお願いいたします。

—— ゆいの会のぼり完成 ——

邑久光明園創立110周年式典がことし5月行われ、ゆいの会は長年にわたる光明園でのボランティア活動が評価され、表彰されました。

そして、感謝状と、記

念品として「のぼり」と

「シヨルダーメガホン」

を贈呈されました。

今後、街頭活動などさまざまな機会に活用していこうと思います。





3月2日、街頭で募金活動を行いました

◆十坪住宅修復保存活動報告

ゆいの会では、この約5年、愛生園の十坪住宅の修復保存運動に取り組み、これまでに計636万1千71円の募金を集めることができました。ゆいの会の会員の皆様からも多大なるご支援を賜りましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

現在この募金で何が出来るかについて建築士の専門家との打ち合わせを重ねています。おそらくこの金額だけでは完全な修復・保存は不可能でしょうが、われわれ民間の力でもこれだけのことが出来るとの成果を示すことで、さらなる国による保存の動きに繋げていきたいと考えています。

また、この5年間で署名も133,734筆集まっています。この署名についても、十坪住宅の修復、保存の実施の詳細が決定した段階で、厚生労働省に持参し、今後に向けての要望を提出したいと考えております。さらなるこの活動へのご理解、協力をお願い申し上げます。

(運當柔女員 則武 透)

◆ **くわぐどくふふとてんぐ事業、
募金活動結果のご報告**

前号にて、十坪住宅修復保存運動に
関し、公益財団法人みななをつくる財団おか
やまの実施するクラウドファンディング事
業に応募し、公開審査を通過したことにつ
いて報告させていただきました。

公開審査通過の直後、西日本豪雨災害が発生し、募金活動の開始を延期しておりましたところ、本年の2月から3月にかけて、募金活動を行いました。岡山駅西口で、「ゆいの会」メンバーで募金の呼びかけを行ったほか、インターネット上でもクラウドファンディングを実施し、日本全国の皆様から募金をいただきました。皆様の協力により、合計で71万4,697円を集めることができました。

皆様からお預かりしたこの募金を、イン
セン病隔離政策の歴史を後世に伝える、
十坪住宅の修復保存費用の一部として、活
用させていただきます。

今後とも、会員の皆様の理解と協力を宜しくお願い申し上げます。

(運営委員 小野祐一郎)

◆世界遺産登録に向けたロード
マップを作成 世界遺産NPO
報告

NPO法人「ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会」は、ことし3月、世界遺産登録に向けたロードマップを作成し、2019年度からこのロードマップに基づき、登録に向けて本格的に動き出しました。

5月にはホームページ(<https://www.hansen-wh.jp/>)がリニューアルされ、より見やすくなりました。また、ツイッターやフェイスブック、インスタグラムといったSNSも運用しております。

また、NPO法人では講演会などさまざまなイベントを行っております。会員も随時募集中です。詳細はホームページをご覧ください。

(運當委員・NPO法人理事 古謝愛彦)

◆長島を走りませんか-

「長島でマラソン大会をしませんか？そして大会を通して、マラソン病への理解と関心を高め、参加費などを基にして十坪住宅の保全活動資金にしませんか？」

2019年4月、ゆいの会総会後の花見の席で、前々から抱いていた考えを先輩方へ話してみました。

私がその想いに至ったのは2016年始めてこの島へ訪れた時、島からの景観に魅せられ、市民ランナーとして走ることに夢中だった当時「ここでマラソン大会したら面白いんじゃないか」と思ったことが始まりです。

その後ゆいの会の会長になり、この島の
りとや歴史について知っていくうちに、今
まじかに何も知らずにいたかと痛感す
ることも、自分にできる何かを考える
ようになりました。

この島でもあったことを教訓とし残し伝えていく上で建物保存は重要です。現在NPO法人によるハンセン病療養所の世界遺産登録活動も進んでいます。そのような中、冒頭にあげた「長島でマラ

ソン大会を」という考えにつながって
いきました。今回の長島マラソンの提案が
果たして自分が想い抱くものとなるかと
うかわかりません。ただやってみる価値と
意義はあると思っています。

長島でマラソン大会が開かれた。多くの人がこの島へ関心を寄せ、心身病への正しい理解を持ち、これまでの教訓がこれからの社会に活かされていくものとなれば何よりと考えています。

メロンに興味のある方、「長島メロン計画」の実現のために協力ください。

(16期生 松谷夏洋)

熊本地裁での家族訴訟勝訴判決を踏まえ、超党派の国会議員懇談会が家族への補償法案骨子案を提出し、今国会での成立を目指すことが決まったと成し、新聞報道に接しました。誤った隔離政策は、強制的に入所を強いられ一生療養所で過ござるを得なかった入所者の方々はもちろんのこと、そのご家族に対しても深刻な被害を与えました。今回のご家族への補償制度の創設は遅きに失すると言わざるを得ません。なぜ、この国では司法の判断がなされぬ限り誤った政策が改められないのでしょうか。強制隔離政策の過ちを後世に伝えるためにも、十坪住宅修復保存の取り組みを進めていかねばならないと決意を新たにしました。

(編集長 則 武 透)

後集編